

# 終える命、

## つなぐいのち

國森  
康弘

第13回 元気増やす、  
家族の力

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。  
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。

「チーム永源寺」に強力助っ人、たっ君が加わった。

私、  
たっ君を抱っこしたい

デイサービスにも元気に通うようになった。

いのちのボタンはつながれていく。

# 子

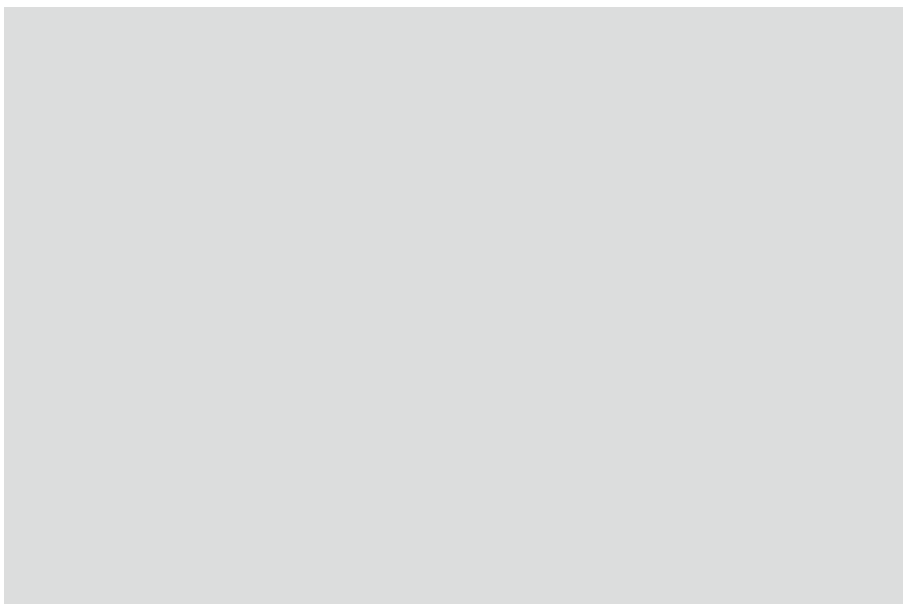
宮がんなどを患い3回腹にメスを入れ、認知症も深まっていくなか……、寝たきりの久子さんに、笑顔が浮かんだ。ひ孫のたすくちゃんが生まれたときのことだ。

「私、たつ君を抱っこしたい」

生活に張りが出てきた。髪の毛にくしを通し、服を替え、来客にはお茶を出そうとする。だんだん起き上がるようになり……そして、たつ君を抱っこした。「この子の成長する姿、見ていたい」とまで言うようになった。

久子さんの家は代々、神社の神主さん。滋賀県東近江市に暮らした。訪問診療に通った永源寺診療所の花戸貴司医師は、治療方針を変えたわけではない。薬も同じものだ。なのに、久子さんは元気になっていく。「病気は変わらず、治らなくとも、元気が大きくなれば、相対的に病気は小さくなる。医療にできることは限られていて、やっぱり家族の力、家の力にはかないません」と花戸医師は頭をかいて、ほほ笑む。

ケアタウン小平クリニックの山崎章郎院長によれば、同院長が施設型ホスピスに携わっていた時代には約半数の人に医療用麻薬を常時注入する装置をつけていたが、在宅ホスピスに移行してからこれまでの十余



年、600人超のがん患者には一度もその装置をつけない。経口薬、貼付薬、坐剤の組み合わせで、結果的に、不要だったという。……家の力、家族の力は、がんの痛みさえ和らげることがあるのかもしれない。

かくして、久子さんは要介護度がどんどん軽くなっていった。ついには要介護の認定もされなくなり、「福祉のベッドも借りられなくなってしまいました」と家族も笑顔。多職種連携の輪のなかに、ひ孫のたっ君が加わった。

すすすすく大きくなっていくたっ君の姿を、何年もまぶたに焼き付けてきた。そんな久子さんにもやがて旅立ちの日が、くる。夕食後に行ったトイレで、意識を失い、倒れた。脳内出血。危篤状態でふとんに横たわる久子さんに、お腹を大きくした孫が枕元でお願いをした。「おばあちゃん、もうすぐ生まれるから、もうちょっとだけ待っててね」。

孫の願いに久子さんは、応えた。新たなひ孫が誕生するのと、バトンタッチをするかのように、息を引き取る。孫と赤ん坊が、病院から退院してきたその足で、久子さんの元に駆けつけてきた。「何週間も待っていてくれて、ありがとう……この子、おばあちゃんに、そっくりだよ」。(2011〜13年撮影)

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ(農文協)ほか。